

## NPO 法人 森林再生支援センターニュース

発行：2000.10. 4

特定非営利活動法人森林再生支援センター 理事長 村田 源  
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5 TEL/FAX 075-211-4145  
ホームページ：http://www.crrn.net / E-mail：info@crrn.net

### 地域固有の緑を目ざして

理事長 村田 源

#### はじめに

日本の山はどこを見ても緑の林に被われている。このことは、日本は北の端から南の端まで、森林が成立するための必要な条件がそろっているということを示しているのである。年中雨が多く、どこでも草が生えてきて、放置しておくとも木が茂って林になってしまうという恵まれた環境である。

さらによく見ると、目のとどく山の斜面の大部分はスギやヒノキの植林である。北海道まで行くとスギやヒノキの林は見られないが、これは冬の寒さがきびしくて、これらの木の生育を許さないためで、エゾマツ、トドマツなどの人工造林がこれにとってかわる。

本州の山でも、太平洋側と日本海側とではかなり気候条件が異なる。日本海側は冬に雪が多く（世界一多雪地帯）、太平洋側では冬には晴れた日が多い。

日本に一番多いのはスギの植林で、一見どこのスギも同じように見えるが、それぞれ地域によって性質が異なり、その地域特性を生かすように昭和の中頃までは品種改良や手入れの工夫もなされていた。

#### 個性を失った戦後の造林

吉野杉、北山杉などとそれぞれ特産地の名前が残っているように、かつては地方色豊かな銘木がそれぞれの土地の特性を生かして育てられてきた。地形、土質、技打ちの方法なども製品となった木材の性質に大いに関係する。山の木は木材を育てる畑という感覚で、世界にまれな独特の発展をとげてきたのが日本の林業であった。

林業が健康であった時代には造林地のまわりには豊かな自然林（原生林ではない）がどこでも見られたのが普通である。

戦後急速な経済成長の中で、拡大造林が叫ばれた頃から日本の林業はだんだんあやしくなってきた。どんどん効率の悪い自然林を伐採して生産性の高い人工造林に変えて行こうというスローガンのもとに、粗製乱造の造林地拡大と植樹が行われてた。

今、その内容を云々するつもりはないが、結果として大変な自然破壊が行われた。

造林地として適さない所まで林地を拡大しながら、手入れも行きとどかないし、植林した苗もそれぞれの地域にあったものを厳選したものではなく、各地から寄せ集めて間に合わせたもので、雪や風などによる天然被害も増大した。そこへ外国産の安い木材がでまわってきたのである。外材といわれて輸入されてきた木材は、ほとんどが天然木である。国産の人工造林木に較べると品質もよく、その上価格も安いのは当然である。

しかし、天然木は無尽にあるわけではない。一部ではすでにその資源が枯渇してきている。今こそ地域固有の豊かな森を育てることに努力しなければならない時である。

#### これからの緑化

これまでは緑化というとほとんどが造林のための植樹であった。近年は、更地の造成やダム建設、高速道路、林道工事などが機械化によって大型化し、開発

にともなう裸地や法面の緑化が主体となってきた。主要な造林用の樹種や苗木の生産に関しては林業試験場や大学の演習林などによる地域に即した基礎的な研究もあり、それぞれの地方の銘木と言われる木から種子採取するというところまで行われていた。ところが、法面の緑化となると資料もマニュアルもないのが現状である。道端に野生している草の種子を集めることすら至難の技で、はじめは牧草の種子が用いられた。最近では、国産種子混入で肥料と混ぜ、ビニールの網で保持する方法等いろいろと新しい試みがなされているが、実はほとんどが国産の種子ではなくて、韓国や中国東北部からの輸入種子が用いられているようである。日本からアジア大陸東北部にかけて共通に分布している植物でも、日本に生えている個体と大陸に分布している個体とは性質は同じではなく、種名は同じでも集団としても異なっているのが普通である。

林道の開設によってできた法面では、尾根をけずった部分、各谷の埋め立てた部分など、岩質や節理の方向、地下水の状態などによって大きく性質が異なっている。したがって、同じ地域であっても緑化の方法や用いる草や木の種類など、場所によって大きく異なるはずである。

#### 附近の林の様子から環境を読み取る

今後の緑化は先に述べたように、自然林（ここでいう自然林は、人工的に用材を育てるために植えた植林に対して使用する言葉で、原生林を意味するものではない）で行われることが多くなると思う。今まで以上に植物生態学の知見が大切になってくると考えられる。一般に暖かい地方では、常緑の林が発達し、寒い地方に行くとならば落葉性の広葉樹林（夏緑林）が発達するといわれているが、それは広域的な話で、実際にはあまり役にたたないであろう。

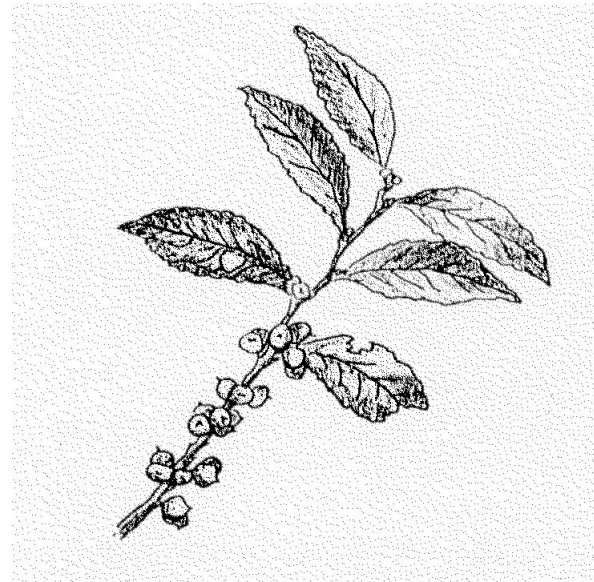
たとえば、市町村位の単位で考えれば、気候（雨量や温度）、高さなど全て同じレベルに入ってしまう。にもかかわらず、コナラ林などの落葉樹林が山すそ（里山）にあり、常緑針葉樹林（人工の植林である）が、谷間にあって、かえって山の上にアカマツ林やシイの照葉樹林が見られることが多い。

これは、人間の力によって植生が変えられたためで、

最も利用しにくい尾根の上に自然林の姿が残っていると見ることができる。スギの植林は、水分環境が恵まれた谷間の一等地が選ばれているが、植林がなされていないとケヤキ、ホウノキ、トチノキ、ミズキ、カエデ類、シデ類などの落葉高木があって、林内にツバキ、アラカシ、ヒサカキ、ヤブニツケイ、シキミなどの常緑樹があることが多い。岩場で乾燥する所にはヒノキ、モミ、ツガ、アカマツなど常緑の針葉樹が生育している。これは、針葉樹が岩地が好きなのではなくて、普通の土壌の所では発芽してからある程度大きくなるまでに枯死してしまい、岩地で他の植物が増えられない立地に生えたものだけが生きのびたと考えられる。

尾根の一部をけずり取って、下の岩盤が露出したような所は、表面に凸凹をもうけて、表土のたまる場所を作る工夫が必要であろう。

いずれにしても、その場所のまわりにある残存植生を読み取って、自然の植生の回復力を支援する方向で緑化をすすめることが重要な条件であると考えられる。



## 【設立趣旨】

人々の暮らしは、地域固有の森を中心とする自然環境と深く結びついてきた。豊かな森があってこそ、地域の人々の絆が強められ、子どもたちの心には、ふるさとにつながる原風景が形づくられてきた。

しかしながら、この豊かな森は、現代の利便性と引き換えに、あるところでは放置によって荒廃に向かい、あるところでは収奪によって喪失へと向かっていった。

われわれは、豊かな森とは第一に人間のために美しく実り多くあること、第二に数多くの生物がいきいきと暮らしていること、第三に地域の歴史や文化のあらわれであることという地域環境にとっての三つの意義を兼ね備え、ひいては地球全体の環境保全に寄与しているものであると考える。

われわれはこのような豊かな森を守り、育てるとともに、そうした活動をする人々を支援するために、ここに本センターを設立するものである。

本センターに属する会員は、このような趣旨に沿って、各々の自発的な工夫と相互の協力によって、以下の活動を行う。

- 一．地域自然環境の保全・再生に係る調査及び研究
- 一．地域自然環境の保全・再生に係る実施事業
- 一．地域自然環境の保全・再生に係る行政機関、事業主体、特定非営利活動法人、及び市民ボランティア団体への助言及び技術的援助
- 一．地域自然環境の保全・再生に係る教育普及事業
- 一．地域自然環境の保全・再生に係る行政機関、事業主体、研究機関、学会との交流
- 一．その他本センターの目的達成のために必要な事業

## 【申請に至るまでの経過】

本法人の会員になろうとする者は、すべて何らかの形で自然環境を学び、学ぼうとしております。

その内の多くは、保全、創出に係る調査研究、計画、設計、実施を職務として担ってききましたが、昨今の森林の荒廃や、自然の成り立ちに対する理解を欠くことも多い緑地の造成をみて、微力ながらも、その専門的知識、技術を自然環境の保全と再生に役立てたいと考えました。

自然環境に関する基礎的な調査研究については、生態学、分類学などの研究者が、計画、設計については多くの実績をもつ専門家や研究者が、実施については、緑地行政、苗木生産に携わる樹木医や造園家としての専門性の高い技能者などが中心となり、

これに地域自然環境の保全・育成に関心をもつ一般の人々や専門家を目指して修練を積もうとする若い人々が加わって互いに学び合いながら、ボランティアとしての地道な社会的貢献を果たしたいと考えております。

平成12年1月8日	設立総会	参加者約30名
平成12年5月8日	特定非営利活動(NPO)法人認証	
平成12年6月17日	第1回年次総会・記念講演会	参加者120名
現会員数	正会員	52名
	賛助会員(企業)	8社

## 【第1回年次総会・記念講演会・懇親会】

6月17日午後1時半より、120名の方々にお集まりいただき、お披露目、顔合わせの総会を開催しました。ここでは、本センター村田理事長の式辞の後、来賓として、林野庁近畿中国森林管理局局長、建設省近畿地方建設局環境審査官、環境庁自然保護局小野寺自然保護計画課長、京都府再資源化組合中谷理事長のご祝辞をいただきました。総会の議事次第としては、設立の趣旨、経緯の説明の後、予算案、事業計画についての承認をなされました。

総会に引き続いた講演会は、村田理事長が「豊かな地域固有の森とは何か」、高田常務理事が「森林再生支援センターの役割」という演題で、それぞれ40分の講演を行いました。

## 【森林再生支援センターの役割】

本センターの趣旨目的に沿って、次の点を大切にしたい、ということがこれまでの会員の議論の中でなされています。

住民としての視点を大事にする。

(地域に暮らす人々の視点と専門家としての視点の一致を図る)

行政、業界、学界と市民をつなぐ機能をもつ。

「地域固有の自然環境の保全、創出」することが大きな社会的な利益とつながるという視点をもつ。

学問、技術を社会に還元し、社会からこれをフィードバックすることによって深める。

基盤となる自然の成り立ちへの理解を深め、広く社会と共有する。

美しく、誇り、愛着の湧く環境(郷土)づくりをお手伝いする。

工夫と達成感の大きいかわりを大切にする。

次の世代の人材の育成の手助けをする。

## 王滝村に寄せて

高田 研一

御嶽山の山麓、木曾谷のもっとも奥深い王滝村にふとした縁で呼ばれて、ここを訪れるのは四度目になる。平成十二年五月に最初に訪れたときは、私たちの森林再生支援センターがNPOとして認証されて程なくであったが、この地が、私たちの活動と関係してくることになるうとは思われなかった。

昭和54年10月に長い間マグマの動きを閉じていた御嶽山が小規模な噴火を起こし、村民を始めとする多くの人々を驚かせた。その後の御嶽山の動きについて一部の人たちには心配させたものの、ひとときの静寂は、徐々に平常の生活へと戻らせ始めた。しかし、その矢先の昭和59年5月、大きな地震がこの村を襲った。長野県西部地震である。

この地震によって、村の方々に、大小の山崩れが発生したが、その内でも、もっとも大規模な崩落は御嶽山九合目海拔2800m地点で発生したもので、高低差1500m以上を一気に駆け下って、湯治場を飲み込み、谷を埋め、突風をともなって周囲の森林まで根こそぎ破壊し尽くした。

美観で知られた谷あいの溪谷は押し寄せた土砂によって深さ30mの地の底に沈んだ。大きな崩積土の河原や台地があちこちに出現し、草木一本とてない、さながら地獄の河原の様相を呈したという。周囲の山崩れを含め、29名の命が失われ、村は茫然の内にしびしを過ごすこととなった。

王滝村は、木曾五木として知られるヒノキなどの針葉樹豊かな森に囲まれた村で、かつて日本の代表的な林業生産地として知られた存在であった。

すぐれた木材の産出は、その森が民の所有であることを許さず、古くは御料林として、近代に入っても国有林としての経営が続けられてきた。特に戦後の木材需要期には、森林鉄道は絶え間なく、材木を都会へと運び続けた。

より大きな利益を上げるために、伐採後の植林を行

うことはあっても、大規模な皆伐を進めたために、ローテーションを組む循環的な森林利用が困難で、森林は元の姿を失い、保水力は失われた。こうして、数多くの営林署の職員が、束の間の幸せな日々、善意にくるまれた村の豊かな日々を、森の資源を奪う中で、過ごしていた。

ただ、林野庁に対する多少の弁護をすれば、当時の社会状況にあって、皆伐とその後の造林を基礎とする近代林業のあり方に対抗するような理論が成り立ちようがなかったことも事実である。

やがて日本経済の高度成長の中で、木材の相対的価値が下がり、伐るべき森の面積が乏しくなるとともに、威風を誇った営林署のペンキは剥げ、一人一人と、人は去っていった。営林署とは直接の関わりを持たない村民にとっても、林業の衰退は村の活気を奪い、多くの若者が、村を離れ、遠く新しい都会の場に我が家を構えるようになった。

蚕を飼い、絹を紡いだ村の大きな家も、もはや重労働と少ない報酬では、家計を支えることができず、息子や娘の仕送りのままに、やがてその大きな柱を朽ち果てさせることとなっていった。

しかし、王滝村は御嶽山の村である。

この壮麗雄大な山は、御嶽信仰の場として、絶えず広く遠方からの登山者を集め、季節の賑わいをもたらせてくれている。バブルの時代、都会の人々は車を連れ、別荘を買い、切り開かれた大きなスキー場で冬の一日を楽しむようになった。

いま、果たして、村は豊かになったのか。多くの子どもたちが元気に遊び回っているのだろうか。若者は町から村へ戻ってきたのだろうか。

地震が運んだ大量の土砂は、王滝川をせき止めた牧尾ダムに流れ込んだ。このダムの貯水能、発電能を回復するために、大規模な公共事業として、ダムの堆砂を浚渫する事業が現在進められている。この浚渫土を

積み上げた新しい公園が企画されている。

この新しい公園は、しかし、行く未久しい地元の思い、もう一度村が村として生き生きとしてよみがえるために貢献できるものになりたいという思いを果たすべきものである。だから、どこでも、だれでも手軽につくる緑化では駄目、地元を知らない人だけがつくる緑化では駄目、地元の自然と無関係の材料だけを使う緑化でも駄目、多くのお金が自動的に東京へと還流していく緑化でも駄目…。さまざまな思いが交錯する。

これまで、村を囲む自然は大きく変容してきた。天然の森は失われ、ヒノキやカラマツの人工林に変わった。多様性が高かった広葉樹の森も、そのもう少し前から、単調なミズナラの萌芽再生林へと変わっていた。

私たちは、王滝の人々と同じ地平に立ちたいと思う。王滝村の思いを自らの頭の中で十分すぎるほど咀嚼しなければならない。

近代土木がつくった浚渫土造成地という、水に乏しい厳しい場所に、思いを具体化する困難な作業が待ち構えている。

最初の二十年は、森はそれほど育たないであろう。だから、村で大事にされてきたライラックを植え、ニシキウツギを植えよう。これら花木の横には、百年後には、春にオオヤマザクラの花を楽しみ、秋にカエデやクリ、シラカンバの林で紅葉と遊ぶ場にしよう。こどもには、跳ね回れるハルニレの大木の回りの原っぱを準備しよう。少しの薬草とキハダはいつでもだれでも見つけることができる場に育ってもらおう。

たくさんの種類の木を植え、その時、その場に応じた植物が住み分けができるように考えておこう。日向の木も日陰の木も、辛抱してやがて実を結ぶように考えておこう。

肥料は自分で調達できるように微生物の多い環境にしよう…。

私たちは、願いの中で生きる者でありたい。NPOで働くことは、単なる奉仕活動を行うことだとは、私は考えていない。自分にとっては、専門家としての良心に沿うことであり、社会的には、文明の基礎を導くものであると思っている。その中で、生き、その中で死んでいく、ふつうの生活の一部でありたいと願っている。

## < 会員諸氏からの問合せに お答えします。 >

### (1) 専門委員の委嘱に関して

会員の方々の多くは、何らかの専門分野をお持ちの方々に、現在、そのすべての方に専門委員とさせていただいているわけではありません。

専門委員になっていただいても当然の専門知識豊かな方々がおいでになることは承知しておりますが、専門委員はかねてからお知らせしておりますように、理事会において、委嘱するということになっております。その関係上、当面は、自薦、他薦で専門委員になりたい、なってもらいたいという方を順次、理事会で協議の上お願いするという段取りになっております。

ただし、現在、理事会において委員の委嘱基準を明確には定めておりませんので、役員のみならず、会員の方々のご意見もさまざまに出していただいても、基準づくりを進めていきたいと考えております。

### (2) 森林再生支援センターの現場への参加 について

現在、当センターへの委託業務として王滝村の自然を生かした公園の緑化計画の策定に取り組んでおりますが、これ以外には、最終的に未確定ながら、以下の活動を計画、依頼されております。

#### 大峰山のシカの食害からの植生回復を 考える現地調査

本年計画していましたが、準備不足のため困難ですので、来年5月の連休頃に是非、調査に行こうと考えております（理事会）。

#### 長野県王滝村から

離村農家があり、季節的に利用できる家を当センターの涼しい野外研修施設として一軒探しましょうかという暖かいご提案もいただいております。これも今後の検討課題です。

#### 東京での森林再生支援センター主催シンポジウム

来年5月か6月頃、何人かの専門委員の方々にお願いして、東京で1周年の記念シンポジウムをしようかという企画が理事会で出ています。

専門知識をもつ方に限らず、具体的な活動に取り組みたいとお考えの方も多いかと思えます。

事務局経由の話はこれからいろいろと出てきそうですが、遠距離の会員の皆さんは、それぞれの地方でそれぞれのやり方で頑張ってください。そして、技術的、理論的な相談ごとがあれば、メール上で、たくさんの専門委員に相談下さい。また、その中味について事務局、または村田理事長まで適宜ご一報下さい。ただし、当センターとして、責任を負わなければならない仕事については、事前にお知らせ下さい。

専門知識をもつ方に限らず、具体的な活動に取り組みたいとお考えの方も多いかと思えます。

### (3) 委託業務への積算基準について

積算のベースをどうするかは、もう少し議論を待ちたいと考えております(理事会)。

### (4) 会員相互の情報交換の機能がまだ不十分では?

ご指摘の通りです。ホームページの充実とメールの活用を皆さま方の協力で進めていきたいと願っています。

ホームページ：<http://www.crrn.net>

一般からの各種問い合わせ

：[info@crrn.net](mailto:info@crrn.net)

会員全体のメーリングリスト

：[member-ml@crrn.net](mailto:member-ml@crrn.net)

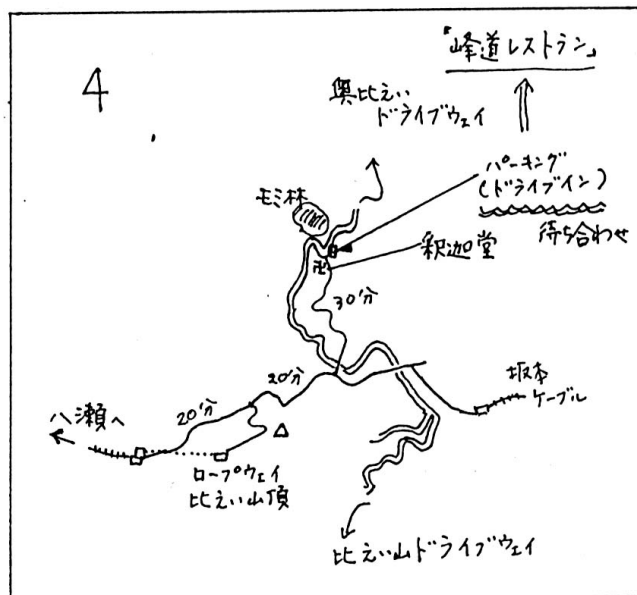
使用方法是、メールをご使用になられている会員の方にはお知らせした通りです。

新しくメーリングリストにお入りになりたい会員の方はアドレスを当事務局までお知らせ下さい。

### 比叡山のモミ林観察会に出かけませんか

直径1mを越えるモミの大木の林床に、育つことのないモミの芽生えが多数死ぬ時を待っています。これをいくつか持ち帰って、プランタで5年間育て、これを自然の回復を待つ山に返しましょう。

もちろん、モミの大木と紅葉を見に行くだけでも結構です。



日時：平成12年11月4日(土) 午後1時

奥比叡ドライブウェイ 峰道レストラン前集合

- 1) 八瀬からケーブル 徒歩
- 2) 坂本からケーブル 徒歩
- 3) 比叡山ドライブウェイを通って車 雨天決行

### 『季刊森林再生支援センターニュース』の発行に際して

私たちの森林再生支援センターが発足して以来、会員相互の連絡情報誌の発行が急がれていましたが、なかなかこぎつけるところまでいかず、皆さま方にご迷惑をお掛けしておりました。

このたび、まだまだ貧弱ではありますが、とにかく第1号を発行することに致しました。大きな記事は、村田理事長と高田常務理事の原稿によりましたが、今後は、会員の皆さま方の積極的なご投稿にも期待しておりますので、よろしくお願い致します。

### ご入会について

ご入会を希望される方は、事務局までご連絡ください。

折り返しご案内と申込書をお送りします。

入会金 3,000円  
年会費 3,000円

特定非営利活動法人森林再生支援センター  
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5  
TEL/FAX 075 211 4145